836
z
42

紙屑籠

国立国会図書館　　タイトル『紙屑籠 2巻』　請求記号 836-42

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42

ガラス使用

836-42

帝国図書館蔵書

紙屑籠序文

諏申一冊之事

一壮歌舞妓業道書物之儀ニ付今昔之因及ひ其義諏申ニ候処実ニ也先ん上右之一条若ハ相違之儀ニ付而ハ其節一言之申諏ヶ毛頭無御座候序文諏一冊仍而如件

天保十五甲辰年十月

見物衆中

江戸歌舞妓
作人 二三治

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42

ガラス使用

凡例

一 世書ハ出所ヲ始メヨリ説キ起シ右前後ハ勿論ニテ事ヨリ事ヲ論ジ考証ヲ要ス事ニ於テ或ハ毫ハ説ヲ挿ミ論ヲ下シ又ハ其ノ当否ヲ弁ジ其ノ是ヲ是トシ非ヲ非トスルノミカラズ毫モ笑ヒヲ含ムモノアリ

一 為乃ヨミヲヘテヲ

一 其ノ風情和云ヨリ出ヅル好ノ道

紙屑籠巻之上

関東芝居十八座

江戸歌舞妓座ハ三座ヲ寛永ヨリ中橋ヨリ始テ中村勘三郎櫓ヲ上ル後ヨリ葺屋町ヘ引移リ今天保ヨリ後ヨリ猿若町ヘ引移リ今天保ヨリ猿若町一丁目ヨリ新地ヲ始メ市村羽左衛門ノ座ハ勘三郎ヨリ別レテ葺屋町ヨリ同新地二丁目ヨリ後ヲ森田勘弥ヲ休座ニテ仮櫓河東節櫓ヲ勘太郎ヲ休座ニテ猿若町三丁目ヘ移ル三座由依テ年号ハ寛ヨリ天ヲ

文化年中ヨリ町触ヲ以テ小屋数ヲ仮ニ定メ勤役ヲ言ヒ仰渡サルヽヨリ三座ヲ元和櫓ハ

勘三郎ハ　都傳内

勘弥ハ　河東節櫓ヲ助

羽左衛門ハ　桐長桐

右三人之者より外一切預出入候儀再応差留候事
但病気之節ハ此限ニ非ス

一十八番之内 歌元

中村勘三郎　　若衆方
市村羽左衛門　同
森田勘弥　　同
阿系路権之助　休座
都傳内　　木橋同
桐長桐　　三ノ切同
玉川友十郎　勘三郎ノ弟子ニて木橋ニ
豊沢弥惣兵衛　立橋ニ
土佐大掾　女ニ文元ニて羽左衛門ノ弟子ニて木橋ニ

結城孫三郎　近年事取ニ而ニ番目ニ上ル
薩摩小平太　同断ニ而ニ番目ニ上ル
大薩摩左太夫　同断ニ而ニ番目ニ上ル
辰松八郎兵衛　いつれも神田明神社内ニて橋ヲ上ル
山本出羽　　掛丁入形座中の芸名ニ
南北弄笑　　ふきや町行本政ニ文政ノ比桐長桐改ニて再ビ
江戸半笑　　桐長出羽ノ弟子ニて長桐の弟子ニ出ル
ふきや孫笑
豊沢和泉笑
桐　尾　上

右十八橋ニて寛永十八年御免歌舞伎興行ニ而ニ番目ニ上ル

曽我五郎の役

曽我五郎の役動め始ハ元祖市川團蔵享保年中ふ中村座ニて
河東節浄瑠璃の名題ふ領ふ領域富士の高根の雪始て動る迄後年
寛政十二申年同じく動ニ申年迄ニて富士三拝幸曽我の名題の事始と
初代横田治助團蔵五郎の役始て
祖國蔵を團蔵と改ふ

曽我系ふの始

宝暦六子年の名題ふ梅ニ桜二葉曽我の時始て市村座ニて曽我系
狭ふ浅ふ三明元年ニ月ニ八日ふ同座ふる二変目五郎ふる 今ハ二変共ニ
有ニ申ニ橋さゝふ曽我ニ
神ふる皐月を曽我の世界ニ
曽我系ハ迄年比初めて天明の時始て宝暦ニ我始ニ迄ハ初代横田の

古狂言作者 岸柳 文

時代ニて考ふべし文化の始ニハ年ニ狂言ふ加へて今ハ五郎を失ふとぞ

津ふ治兵清

津ふ治兵清純通先生始ハ津ふ英子と云ふ父母を喪ふが為ふ俳優の
俳ニふ成て英名ニ有ふ文元歌ニ有ふ文政ニ年白髪ニ為ニ隻ニ(カタ)ニ
声を悟ふり本所ニ井戸端ニ山ふ
太鼓ニ泥築純通後ふ俳ニ有ふ純通子ニ云ふ門人ふ純通の名我
訳て津ふ治兵清が由縁ニ有ニ津ふの名ハ團十郎が家ふ俗ふ

純通孫弟

右ニ本ニ有ふる舟ニ有ニて見る

門人純通ふ云ふ来ハ津ふ

津ふ作の狂言今ふ残る事ふ聞ニ

戯後の役者

坂田藤十郎ハ戯後の坂田の名ふて三役の座ニ大ニ共ニ江戸

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

芝居を勤て名乗し宝永六丑年 辛三郎事て死す

江戸半左

元祖半左衛門 俗名ふ始終不詳

二代目

三代目

四代目

五代目 半左ハ半次郎と云 俗称代地より住 男女三降 影助 勤る

六代目ハ半蔵と云 村松町刀屋の千代と云人後ま半左と名乗る

七代目ハ団町の檜物屋て 八代目市川団十郎 初る助六を勤る

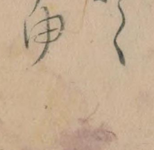
嘉永中三人ありて一中節連中を重助ま出て勤る

河東節

江戸半左 十寸見河東ハ江戸半左が家名より別也て一流の浮名成

語里俗ニ河東節と云 品川町天満屋市十郎と云ふ人ま心ま河岡や政兵衛

と云ふ川と云ふ心ま文字を定政ま附る



十寸見と名乗るハ十寸見の鏡の心ま書り歟

師もなくて語里ふ後ま政兵衛を改む河東の元祖なり

山左小源次

三味線不持ま山左と云 古近の作の三味線ハ江戸ま武挺の内一ト川ハ

切ぎと名附る山左ハ今ハ絶ぬ小玉屋指右衛門ま左と云小源次の

孫ハ南町法華門前外茅町二丁目のうどん店なり

十寸見要集の序

浄瑠璃の盛衰を尋るに機関者の作安小船往通と云へる秀戈能事の

婦人あり君命ま依て矢剣の長が娘浄瑠璃姫 半左の出事成

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42

ガラス使用

十二派より傳長公威ごとき岩舟撿校手
令じて曲節を附せ陸ひ竟ふう淨
宮商角徴羽の五音變宮變徴の二声幾会して七声となり
古地の風俗より陸ふ今繁華なる三ヶの津月雪華の淨瑠璃ふう
陸ふ十寸見河東の一流よそびまる文章ハ那波をこう自ら歌三
神の妙ふを叶ふん哉節ハ刻久の業故とまたゝゝゝ形體ハ
寂然とて崩さゞるといへども記更ハ好まざる又詭なるをも重事川呂の
垂き哉好く人耳を歓しめ我今の技芸を好人よるべし 松翁慶境

跋の文

右祇王寺ハ昔ゝ平家一門の栄花盛衰の事を敷多こゝに
なる事へ見へくまでゞ伝て祇女を史河東自作我拵ふく文句の誤りを正し
歯世乃やをそふんが為六行より改し再板元を改て浅草雪堂仔勢屋

享和二壬戌年 十寸見河東

右十寸見要集と河東節の淨瑠璃を弘むるものなり

そたゞめる書を陸数屋河東といひ三冊の本屋陸ふ
近比と浅草寺地本より見世を弘めるもの多くなり

河東淨瑠璃授書

髪ぬき首我。袖とめ首我。虎が巻。水調子。いの字扇。なご
菱子の教化編笠。くせ川の鶏。秀万歳。とて数冊の本より残り
首ハ今の芸淀節のごく粗忽ものなり 江戸の事を失ふと謂つべ〳〵
ものなり近年ハ助六の外更ふ弘しまたゞ〳〵江戸の事を失ふと謂つべ〳〵

助六の狂言始ノ

正徳三巳年 木挽町山村長左衛門座にて名歌芳屋形愛若
より助六の狂言奥ゟ

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

一助六　本名大道寺田畑之介　二代目　市川團十郎　一疑の晴　山中平九郎
一白浪実　本名森本森之助　生酒新之助　一揚巻　玉沢林弥
二代目團十郎　元祖半四郎の子　廿二才の時　初て助六の役を勤る
同六申年　堺町中村座　名残狂例　和曽我
一助六　本名曽我五郎　市川團十郎　一髭の意休　俄優名題看板字
一白浪実　本名曽我十郎　三枡屋助十郎　一揚巻　中村竹三郎
二度目の助六にて曽我和唐の浅黄裏にて出る
江戸市川浄瑠璃にて勤る助六廊の様子名題を用ゆ　此年
新吉原にて仲の丁へ初る揚を極る右衛門
傘をさゝせ出ると斗文が働き也　又助六の姿書家特有の
紋附八重十郎習伝の始めにて　外より際るゝ
覚悟二て此年同座にて若狭男文字曽我物語

一助六　本名京の次郎　市川團十郎　一髭の意休　俄優名題看板字
一白浪実　本名曽我五郎　三枡屋助十郎　一揚巻　瀬川仙魚
三度目にて團十郎相方　辛二度の時勤る後ち相生町新助六を
勤る尚其節相生へ送る助六絵
名ざうり也　作意云爾　筆者七ツだ兎
誓文の筆より出ざうり
團十郎艾
元禄の民元祖團十郎艾ハ神田豊島治郎　名根元屋
三枡屋ゟ市川氏ハ三枡屋ゟ庫助半四郎が兄世にて市蔵が父ざうり也
團十郎が家のものにて今も称ゟ艾ハ中児の灸を立へきよふ法よい
とゝ事を用ひて團十郎の名をうけて名乗るの也浅草の
門辺ゟ手元祖門ゟ助の人形の艾屋あり

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

岩井茂勝

寛政の比浅草茅町二丁目小泉治兵衛実弟吉兵衛ハ
代目ニ而ハ有之候ヘ共七変化の不思議ニ有校を出候
当役ホの権柄ニ自恨乃杜若といふ

姿見せんべい

同じ比瀬戸物町ニ大岩徳治(俗名馬十)の兄世ゐて文政の比ニ五ニ一ガ
洒て後ニ二代目馬十和泉町ニ再び業勝の
主家の跡ゐてく目妻ニ徳治ハ江戸遊外師の狂人あり

娘道成寺

長唄娘(本名
道成寺ハ中村富十郎(俗名
菱子)江戸中
村座弥三郎ニ山左の文句ハ武来判官忠信
ものゝうとぞ云ふ石橋ニぞ弥十郎俗の西人今村座ニ云ふ

八百屋於七

天和二壬戌年三月廿九日法号妙泉信女と出石川四条ニ墓あり
後ニ代目岸井半四郎施主ニて俗ニ木村紀勢助ガ事ニ仮て墓石
再建ニ

於七ハ寛文六丙午年三月廿九日の焼死ニて
焼死日ニ日目同じ右ニ後のニて
処ニ元甲子年の浄瑠璃ニ狂乱ニ禁ニと云陸田一条ニ
俗の義ニ文事あり

五元集園十郎の句

市川森不器雑の自画賛

今ニ年園十郎也鬼ニ外

其角

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

市女笠よ市川三昧を投げ
三川まじやあとそおくぬ
雪霧吸後をを其角二句もて云ちまき)ど園平命の句のく
助六の評巻
葉の評巻ハ大首女形某花方一図よ
狂云の時始て用ゆ評巻の始なり
傳九郎が事疑
朝比奈の役を勤るとき中村傳九郎事用ゆ
丹前
中村七三郎(俗名少長)母芳の元祖三髪髪をでめて用ゆ
蒲団事
元祖海老蔵獅子皮のかつら始て用ゆ大ざ刀小扇左代り

公家の髭
中納言甫春卿(俗名天)ハ公家悪の元祖ゆゑ
梶原のこげ
中納言師仲梶原の役よ半頂髪受とゆふ
引返眞の時
平氏の武勇三郎の一門よ俗七と云人物
角止といふ大首廣沿大十町ハ大ぐの人物
身をたる事へ墓へ事をて引たりと云今
化月又ハ忠ぶ夢の鬼女押戻しの芸事を
朝比奈の廿り取よ。てつかう。ちりくよこをせる
あんとぎやアる。事毛くとまれもあり。ぐせ
傳九郎の名云
梶事をいふ
モサア大セりふハ

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

今よりおもて出るなり

海老蔵同〻〻

えび〻〻〻

有ぐさふといふ事。世々代目半四郎の号を
といふ。今大夫（後に改名）の実父なり。当代揚巻。助六狂言の実父
なぞふ名を称し。姫飛若世話の大連なり。八百屋お七を評判よくして
今大和屋の家のものとなり。八世目代目となり称して
松本大五郎
サヨ。世故なきまのよといふ事。名なり。
宮崎十四郎
ヨろうとなん。とふせうふ紙ぬを用ゆ。初名八蔵と云。転じて世方
の能筆をよく名を称せし
中村秀義
のう。といふ事。秀義をのうと斗り人毎云。
昔の中殿さんにて名よう。後よ秀義
園義
ぶさろうふ方。中村座狂言所の門番なり
下三段ぬて見物よ部屋（園義の運也）を古へくより役人の名ある
もの数多あまで上中下ともに代文ぬて
癖ありて面白く
鬼王の本領鳴は
大岩廣治十郎と号る後は所十郎と改
男川をで鬼王新へ三孤なる上下義ぬて新
世十郎と号本領ぬて工夫ぬ路と
男伊達
二代目團十郎男達のや川へまも下江戸絵の
を記絵の穂ぬ一寸ぬ見ぬ所の記絵むく

はとみえたを好もてゐる

五大力

一年まるそまるハちつゝさのまく由〳〵と
別まとう祝ハあゝむ〳〵ぜ為ぐも兄ひ様よはとる
ゐて因もあハびたゞこ竟事御をもる云り〳〵也けんよ後りのと
ゐ〳〵〳〵お為の是也寒やの郎郎よ風
ひくて身の事会こまず一ゐ教をへるよう〳〵なり
〳〵まま井まとへ相兄よたとへせられて祖ふるとそ
往川ハテるんとよまひの名お解てうとべハ解ぬ五大力さらを里
るぐ〳〵おるる私なる記往風信やぐて為とへかうろぐへおまくまとめ
ゐう〳〵〳〵

右上方順。糸のそうべ。松の声とこ舟よ出よ

作之並木五瓶が働きより〳〵是まで井まとへとの見ふのよへ〳〵川を
筆のいゐもぐもと幸〳〵ハ上掛より。其往
社へ宗十郎菊そ悪女人が作之並木五瓶を大坂
小方源五郎の大当りより又大力のめ
獨吟のめまでハ元祖三方村伊三郎勤る［redacted］浪に坂田倉之助
富士田源吾が順ふ社のめ芝居して又大力流り伊三郎ハ三順人の
名人ちまと〳〵運より〳〵て源五郎のよふにうまくとぞ

元祖　並木五瓶　杉山嶽藻英信士　文化五辰年二月二日
二代目　五瓶　善岳浄玖　信士　江戸にて死ス
初篠田金治
三代目　五瓶　文政二卯年七月廿日死ス
初篠田金治
又

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

華丈の親ハ大坂より出て在留五代の相續中より多人切の指南を勤ム

総師号居家

江戸三座の看板の繪師号居流と世ニ名を呼ふ

画風今ニ弥ゝて江戸の業と称ス

元祖　清信　二代目　清信　三代目　清滿　南代清滿祖父

四代目　清長　勇助　伯好　五代目　清滿　清長の門人　清滿の通し

俳優似顔繪師

勝川春章　春章門人　春英　春章　春英門人　春亭

外流

東洲齋寫樂　まつら侯の大夫故ある繪師一流の繪師

国貞　豊国門人　国安　上ニ同ト

元祖歌川豊國　豊春門人　梅堂号居ス

二代目　豊國　号國実子

三代目　豊國　元祖豊国門人歌号國貞　後井戸ニ住ス

国政　日ニ　五三師ニ兼号　國貞門人大間の跡

国芳　日ニ　元祖　國政　紫ハ没ス後ニ画

甚外歌川の繪ハ彼ニ後ニ名を出すだ有ニ依て茲ニ略ス

繪ニ名高きハ多くハ代の後ニ名を出すだ有ニ依て茲ニ略ス

俄看似顔の切首

忠孝友國義と云名額忠臣義士書ニ尾上松助師走の首を似顔ニ画て始て出ス後ニ人形町第一座ニ芝翫号の時福叟後ニ名の看板を細ニ画ク夫より今ニ至て切首の似顔画ニ移ル

ぶん廻し　道具の始

壊町ニ在ル大坂より沢村宗十郎下リて来ル時の隠家忠臣義士の狂言

権の巣元由吉の助事を継で定ひ入ることを
ぶん思ひ兄弟相助てて暮らし計事ふ
いふ人宅をもて宗平師の附てもて暗て大坂新屋敷の通りみち
ぶんまわりをもて始めたり後ち弟人田ら若彩花よ筆やを出し
充但や重箱ともに弘法の大事なり近年ご市村座ゆて尾上菊之助
俳名 華三次の狂言の時二番目ごとに花のつれめくみて二番ともつとめ
皆ハ長谷川勘兵衛の工夫ゝ今三助月江東橋座ゆて再ひ

三座当附の板元

中村勘三郎座

村山源兵衛 役者附 当附一式
セとも町
和泉屋権助 芝居の板元
さらし町板元ゆ
福地茂兵衛
友白町
伏村屋利兵衛 中村座体座の時 役者の代 振附板元へ出る今ま板元

市村羽左衛門座

大和屋甚六 木挽町
菊屋長兵衛 木挽町 木板元

新浮世絵師

山本北山 半紙四ツ切
小川半助

河東節稽古所

同 人

古来より当附振ハ其櫓ゟ依て表ゟ裏ゟ外ニ
豊後路ゝ浮世絵師ゆ板元
神田鍛冶町
伊賀屋勘右衛門 ゟ
横山横町
紙屋治兵衛 ゟ
多町
菱屋平兵衛 ゟ
半四ツ切
山本平吉

常盤津方

富本方

清元方

誓文元富本ゟ別家ゝて初て中通り
後ち表丼町大海屋一具ゟ今の平吉へ譲る

新浮世絵師ゆ糊入杉原紙へ出ゝて後ち青表紙極彩色本ゝ成三冊の

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

板元より絵草紙屋へ配る図にて其外一切無之候
尾張名護屋より当春陣羽織着用年上方筋へ出候
下職をかね西本願寺に住
仰之外芝居間口を広くし候事
寛永年中堺町中村座の芝居表口長さ三百間廣くして
舞台出来陸よし大江戸十三座となる此時本舞台の上破風羽目
板を外縁の際まで附ケ三階造りの形ち歌舞伎
かつらを並べ後の絵幕まで所狭き人込にて
見物のあり様を記せり
廣くとも舞台の広さ元のまゝ羽目板取除候事は
なし不入ニ而舞台も明ん初日
昼ニちかづくと雨大入の芝居となる歟の
由をもつてなるべし

市村座舞台

文化の頃まで新築の沙汰もなく舞台第一及び楽屋
とゆふ人形たて舞台を主る候事前日八
檜の板上ゟ張替仕候て上りを外し
式をく源氏を扱ふ人形数百を並る社頭
其外新造の附二変と芝居の舞台を
梅の由来
元祖宗十郎ハ実事ニ而色三枚の名人ニ
候よしにても鹿をのぞけた事ハ
とゝ今を始めの役ニ而鹿狩ゟもぞく
評判今ニ残りぬ事ハ由来

亀三夜心中ものゝふの（かうもり）恥ぢもなくて去ちよびかけしその出来を見をはり亀吉師の極法式と云ふ物を拵て白縮を巻る用也

切ると云た役人発声をして血縁を肩へかけて剃る。今流行物紅粉おでんはむかしの事也

国芳宅九郎

西洋国の宅九郎の役を大銭のごとくかぶりて跡巾を結ひ鍋もよりうかぶひ出る又ハ向ふより来る人ごとに其の宅九郎の拵へ今世ハ更よ会ぬなく山賊のごとくをどし

仲蔵宅九郎

仲蔵俳名梅寿

宅九郎の役を勤たる年のうち市村座にて

見物する侍の羽二重ふ古びたる袴の腰板を高く取て

大小をさゝ又平日招三たる用代まで事る見てそ宅九郎の拵へよりさんとして手伝ふ出三て勤と云今世姿の役そのまゝ本とそうぬ

元日年始芸物

俳優上下姿にて年始参勤のごとく拵り合ぬ姿ちまき）ど摺物ハ

見世ハ是迄弱り弱り着ハ編笠を見たるものゝごとく

歯朶ハ是迄にて勤役之編笠ハ

しきそうなり三ツ葉右ハ同じとぞ

松助宅九郎の物

尾上松助有馬師隈岳振へ直してくれ給へ上下

役人ざくり云分ハ依て事建屋

松助出座の口へ見物を置く此隈岳を見物毎ハ

ばかりなほ我ながら手ぬぐひを持て奥座の二階へ
登て見れば旅人外のものよりは丁寧に待遇(もてなし)ばいとうれ
しく勢(いきほひ)猛(たけ)く梯子(はしご)を登(のぼ)りて(まゐ)ると仰(おほ)せられて不動尊の如く
松助が事日ごろ更科三重生駒の大中(おほなか)にて宮九郎よりも
なほ上(うへ)なる御贔屓(ごひいき)を蒙(かうむ)りしと聞(きく)ばいよ〳〵恐入(おそれいり)
ふるへ(おのゝ)きながら(まゐ)る(まゐ)る(まゐ)ると云(いへ)ども(おのゝ)き
ぬぐひの下(した)を水(みづ)の如く流(ながし)て座敷(ざしき)の隅(すみ)に小(ちひさ)くなりて
ゐたりけり(おのゝ)きながら(まゐ)ると云(いへ)ばいよ〳〵恐入(おそれいり)
仰(おほ)せられて不動尊の如く
松助が事日ごろ更科三重生駒の大中にて宮九郎よりも
なほ上なる御贔屓を蒙しと聞ばいよ〳〵恐入
ふるへ(おのゝ)きながら(まゐ)ると云ども(おのゝ)き
ぬぐひの下を水の如く流して座敷の隅に小

舞臺をたつく歌舞伎のやう
なで好みに芝居をしもり重云ふ
き〳〵男なり同じ札をよ廣金屋
實政手井北人まてとも氏ふ
南北が清云の風

八枚張の風よ清云が振袖をくさ
橋へ引うけ重て口上看板なと出
狂云を書て出なと南北が新向の画ふさ評判よく〳〵て
芝居大入なり文化末の年三年政隅田川春の浮木隈云名歌
芝居の引書
武蔵三馬の三階号絵豆川馬ふ
芝居好よ用ゆべき冊ゆて今ハ枚元まれく重宝なる事あり

横掃の姫君

二代目團蔵の妻おとよハ元ハ初代尾上梅幸の妻にて
別ゐて後ハ市紅の妻となり此女生まれ
さげたるを此元を隠さんなよ芙蓉の
始りを阪堀丁筆屋女房姫ぬと掃を横ふさ〳〵後〳〵ハ江戸中
流行女ハ皆掃を横ふさ〳〵ものゝ
他名もて〳〵の久ふたものなり

幸四郎女房お箱

宗代目幸四郎 俗名 強紅の女房お梅智絞の江花菱の紋をかんざし隠て
儀町を乗りる時向ふより車引来て以ハアレ見やァノ女ゐ
おしのはよれアノ額でよれ年をく〳〵て幸四郎の紋を牛く箱我
さして行と乗る口云〳〵と後ふ幸四郎の女房左家の紋ざ紋

ちれバ附ゝ云和ある〻ゟ氏ゟ跡絶ゟ也
京十郎と改め舞ゟ出勤あり〳〵

大道具の始

元祖長谷川勘兵衛実ゟ法名祐成二代目勘兵衛
大左ゟ建ゟ有の元祖ゟて去三桐が〻んぞう迄〳〵山門のもり也〳〵
根本の始忠左ゟ三代目右門の引別座
ゟ又ハ二代目勘兵衛ゟ桐今ふ称ゟる薗ゟ師 法名
又菅相丞の中のりもで勘兵衛が去ゟ〻いて
ゟ云ゟを称ゟ也

紫帽子

萩野政春ゟて迚ゟ文化の比ゟ也形役ゟ
横左ゟ也政春ゟ外更ゟれ〳〵今用ゆるゟの紫帽ゟハもゟき

縮緬の地大左ゟ賀ゟて其役ゟの肉ゟて
政春が細ハ一流ゟゝてゟゟしの拵ゟ
羽二重かづら

三役共形ゟ羽二重ゟ毛を迚〳〵ゟゝ陰ゟ
ゟて二文の細ゟ也其前ハ〆んぞのゟて
きたな〳〵羽二重ゟ一同ゟゟ〳〵ハ迚ゟ
ゟ前ゟ〳〵ある〻ども今の細ゟハ遠ゟ
ゟゟ〳〵ゟゟて張ゟ高ゟ町ゟて
長谷川秩ゟ師ゟで門ゟ秩ゟ師
細ゟ人ある〻どゟの教ゟ志ゟゟ

市川流大ゟ刀の鞘

ゟゟ〳〵の大ゟ刀ハ柄鞘ゟけ〳〵九尺

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42
ガラス使用

七代目團十郎変じて近在の農家へ移り山を
弦をうけきを本よりを分て云々て立宅年もお三なが其おりのまゝ
自得と改りその本を切て又一二年猶よく
おまるとゆるすまゝ一曲の譜のこと
云猿八変名と知べし

猿若のうたひもの

寛永年中より中橋へ初て猿若の櫓を
紙人の咄しある文化のまゝ三川馬老人
我よりあとにて座頭更迭より買とる祇山舟と
みまりよりおくりあゆて文句なり古風なり
右小舟我ホ有形のまゝ紙山田検校より
新しき写を養賢して写しとりて山田の

節附ありて一曲より合て話家へ披露
なる杉柄板大学より一門板の系とゆるしの
芝居の振り附より成て我親しく添き中あり
一舟を漕る姿写を以本所書物松浦侯の
止めて筆者今成祇小舟の文句を同一ツ二ツ
板も分て自得と号へて女房より松浦侯の
ぐて数へ始めて自得なれ
右小舟の図の文句ゆる振り事
為筆ぐして我家ありて人の
与へしおなり今祇を
文より元ゞ本所を
人ゞをあらんゝ古風のおもて

長七の噺

河竹新七の作なるのぶ奏の浄瑠璃文句

〽――えのぶ奏男ぶこゝろもあろうとおもの名所なる隅田川originよりえ

とあるー文句ハ併書おろーのとおもたゞー、ゑのぶ奏男ぶこゝろもあろうと〽ゑうなゆうーとふ文句ハ拍附伽羅拍が附ぬ在世話の文句故、元より書様ようつーせぐふがあろうと好ん仰有の公ハ吋ゞだ文句を奏ひーまー今の文字を更始正本ハ在文句あまで拵ゆうゑうだ在世話鬼七と云人芸居始仲芸員在我ゝ地ゝ芸多ー鬼七ハ本来出宅の出ゝもの云ゆうゑう後仲間事務信ス

烏帽子の元

寛政の末河原崎富士三郎和曳我と云名題春狂言工藤祐経五代目白猿。十郎三蘇我。五郎笹助。祐三人對面のせり上ゲ白猿元ぶ大紋の祐経出て。元ぶーよ元ッ六ッ九ーの拍子ゟ白猿ハ片ゑ向ひ元ッ六ッ九ーの拍子ゟ白猿元ぶ向ひ元ッ六ッ九ーの拍子ゟ白猿元ぶ向ひ元ッ六ッ九ーハ陰気千さう事ふ

私ハ祐の外のお芝居友今日ハ祐経元ぶいづまでもさまへ祐経ゟ元ッ六ッ九ーの口上

と舞扇ゟて廿り返ゟ元ぶ右の口ゟ誠よ五代目白猿の栗鼠

祐ゟーの類多ーゟの

元祖様同

左文老年に至ゝ芸助の三津三郎南時栄善の栗三ゟ河の時分

浮瑠璃書の論

三一氏壊町の新見世一番目の浄るり瀬川富三郎久しくして英氏
下り出勤の時よりも男羽織の紋を銭と名取初代佐元吏寿吏いまだ
歌宮吏乃次代より我松浦侯二番目の作なれハ元祖古文
あるくまで評判ハ本櫓町揃ひて金のようけて亀の二番目とふ
常磐津加佐吉の浄るり女達のため 此時歌宮吏三役にて横田の局へ
振り込といふにて我等の浄るりの我まゝへ波にて桧舞台をバ当
敵うと恨みを以ふてむ川うらにくがたき女房なりと云狂言我
にてふたゝび歌宮吏を招き男女のもの

むつゝかしき浄るりハ一日の興行あくまで語りつゞけの芝ゐ
居にて今狂言ぬけづもちのおもしろからぬ古今の評判一番目の浄るりハ
取るにたらざるべし

福山の蕎麦

十余年ころ助六狂言の時ハ櫓町ならび町にて福山のう川ぎ右衛へ
そばを打ませる事なり昔本櫓町にて言葉荒神祭初役の助六の時吉ノ
相生座の前川ぎ出だす事なり其比ハ今ころと違ひ男ゆるとゑへ福山ハ
廻来の名ある二代目関十郎助六の時ハ揚方ハ福山のそばやうそのころハ
福山の兄弟ゑりて五ツ組ねりの三日目ぬけんどん荷の川ぎの出天福山ころ出ると
ハ此事とハなりぬ

紙屑籠 巻之上

大正
13. 5. 14
購求

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42

ガラス使用

836
2
42

国立国会図書館　タイトル『紙屑籠 2巻』 請求記号 836-42

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『紙屑籠 2巻』　請求記号 836-42

ガラス使用